

## WAM 助成事業における訪問支援に関する活動報告

8月26日の夜、WAM 助成事業の初期介入支援に賛同して連携している訪問看護ステーションの代表・スタッフの方と共に、今回の支援ケースの事例検討会を実施しました。

12名の参加があり、ゲストとして、市会議員のくろだ奈々さん、県立看護大の川村道子教授に参加していただきました。

くろだ市議には、市の教育委員会の担当者につないでいただき、9月11日(木)に助成事業の初期支援の必要性を訴えて、学校とNPO 法人の連携による早期支援が可能になるために担当職員にレクチャーしてきます。

その席に訪問看護ステーションからも同席して頂くことで、より効果的な説明になると思っています。

以下、事例検討会の報告です。

訪問看護ステーション心奏の竹井氏に、今回の助成事業で支援されている方2名の支援依頼書と支援報告書を資料に事例検討会を行いました。(個人情報に記載されているので資料は回収する)

2名の方の親と子供との訪問時における対応が記載されている報告書を教材に具体的な事例を通して、支援の課題を投げかけてもらって、参加者の経験などを通じた意見を伝えていただく中に、会ってくれなくても諦めないで声掛けをしていくことで心の変化が生まれる、子供の好きな事を一緒に楽しんであげることにより親しい関係が作れる、という意見などがあり、新たな気づきにつながったり、支援のヒントになったりすることが、大事な事例検討会での意見交換だったと感じました。

くろだ市議からも質問があり、より支援に関しての理解を深めて市議会で訪問看護の支援の必要性を理解していただき、担当課にこのような訪問看護による訪問支援を継続的にできるよう質問して頂く予定です。

最後に、川村教授に報告書に記載されている内容から、子ども、母親に関する心のあり方を解説して頂くことで、より報告書に記載してある文章から読み取れることによって、支援の在り方を深めたり、修正していける内容のコメントをいただきました。

今回の事例検討会で、単なる報告の共有にとどまらず、参加者全員で学びを広げ

る場となり、支援の質を高める協働の姿勢が確認でき、今後の訪問支援活動に大きな示唆を得ることができました。

今回は、9月末に開催することになり毎月行うことで、川村教授の言葉ですが、訪問看護を行う看護者の実力を高めていくことが最善の訪問支援を可能にするので、事例検討会や研修会を精力的に行う必要があるといわれているので、法人としてはそのような方向性で推進していけたら宮崎の地域での支援が新たなステージとして展開されるのではないかと期待しています。

個人的な所見としてゲストのくろだ市議と川村県立看護大教授に関して記載します。

くろだ市議は、WAM 助成事業の研修会に参加して頂き、今回の「不登校やひきこもりの初期介入支援」に関して、以前ドロップインセンターの理事長をされていたこともあり、不登校の家族及び子供支援に対して特別に興味を持たれて助成事業に関しての内容を聞きたいという事で支援センターから呼ばれて来所されたので事業説明をしました。

初期支援をしっかりと支援することが可能であれば、不登校からひきこもりとしての長期化は避けられるし、二次障害としての精神疾患への発症も避けられることを切に訴えて、初期の段階での発見、初期支援、初期回復という流れの支援が構築できれば、宮崎市の不登校対策のモデル事業として位置付けられることを願っていることを伝えました。

その為には、最初に不登校を確認できるのは学校なので、学校にこの助成事業を知って頂くことが先決という事で、学校を管轄している教育委員会の担当部署に行って理解して頂き早期の支援を学校と NPO 法人の連携で実施できるためには、教育委員会にまず働き掛けることを、くろだ市議の取り計らいで日程を決めてもらって担当者に合うことになりました。

また、事例検討会では報告者に対して質問をして、より訪問看護の持っている特性やスキルを聞かれて、今回の訪問型の伴走支援がどれほど家族や子供にとって有効な支援かを確認されていました。

もう一人のゲストとして、県立看護大学看護学部精神看護学教授の川村道子氏も参加して頂きました。

支援報告書に記載された母親や子どもの言葉を新たな視点で読み解いていただき、私たちが見過ごしがちな意味や背景が明らかになりました。

その結果、単なる記録にとどまっていた報告書が新たな解釈や気づきを伴う、より意義のある資料へと深まりました。

さらに、専門的な視点からの助言により、言葉の背後にある思いや状況に目を向ける大切さを再認識することができました。

これにより、事例検討会は単なる情報共有の場にとどまらず、参加者全員が学びを共有し合う場としての意義が一層明確になったと感じています。